

金談にからまる詩的要素の神秘性に就て

坂口安吾

青空文庫

一の巻

棕^{むくはら}原孔明とよぶ尊厳な弁護士があつた。とある屋根裏に棲んでゐたといふのであるが、東京には欧羅巴^{ヨーロッパ}の安宿なみの屋根裏なんぞ見当らないといきりたつ性質のよろしくない読者のためには、BON！ それでは地下室に棲んでゐたと言ひかへてみても一向私の差支えはないのであつて、要するに尊厳なる弁護士事務所といふものは普通地下室や屋根裏の中にある筈がない——ところが尊厳なる弁護士・棕原孔明氏は屋根裏（どつこい地下室）に棲んでゐたといふわけであり、つまり話はただそれだけのことに

すぎない。

さて、尊厳な弁護士・棕原孔明氏は、ひとつの穩やかならぬ（——と私は思ふが、勿論穩やかなことであつても一向私にさしさわりはないのであるが——）事情によつて、大枚三千元といふ聞いただけでも身顛ひのでる金策に苦しみはじめた。参阡円！

だういふ筋の穩やかならぬ事情であつたか、それを聞きたいといふ読者の考へが間違つてゐる。たとへば諸兄弟自らが金策に出向いたとして、金の必要なる所以を滔滔と論ずるところの自分の英姿を想像してみたまへ、概して借金の理由といふものも借金の言訳と同じやうにほんとのことは言へないものだ。要するに掛値のないほんとの話は、金が今にも必要だ！ ただそれだけの話で

あつて、そのほかのことは各々めいめいに勝手なさうして逞しい空想力といふものがある。さういふわけで尊厳な弁護士・椋原孔明氏は、三千円の金策に身体のほそる悲しい思ひをしはじめた。——かういふ話は聞いただけでも身の毛のよだつものである。

すべての努力は水泡に帰した！　こんな悲しい話はない。けれども生憎この物語の読者諸君は（時々これは信じられない真相であるが——）万人が万人金策の苦勞（——うまくいつてもお次には首の廻らぬ苦勞といふのがやつてくる！）に叩きあげた鋼鉄の勇士とばかりは限らない形跡がある。さういふ少数の読者のために私は敢て一片の老婆心から余計な説明を加へておくが、金策に必要なこの異常な勇氣！（これに要する精神力の総量は往々に

して彼自らの所有するエネルギーの総量を突破したかの疑ひすら起させがちなものである）ああ！ この異様な一大勇猛心といふものは、その宿命的な命数として概ね水泡に帰しやすい不運な薄命をもつものである。それにも拘らず、これほどの一大勇猛心といふものは、ひよどりご 鶯越えの荒武者でさへ必要ではなかつた！ ジエノバの人コロンブスでも必要ではなかつた！ 然り然して裸一貫江戸へのぼつた岩崎弥太郎ですらこれほどの一大勇猛心は持たなかつた！ 見給へ諸君、これによつてこれを見れば、この異様なる一大勇猛心の赴くところ、おごる平家を打ちほろぼし、易々としてアメリカ大陸を発見し、然り然り！ のみならず嗚呼あ巨万の富を蓄積することすら赤子の手をひねるがやうに容易であるに

も拘らず、于嗟ああ！ 金策の目的をとげることが却々なかなかできない！
 実にできない！ 頑としてできない！ 断々乎として出来ない
 のである。

金策。これはもうあらゆる悪魔がたくらんだ鼠落しへ跳びこむやうなものである。軽率に人間業と思ひこむのが間違ひのもとである。と信じなければならぬことだ。

尊嚴な弁護士・椋原孔明氏も、言ふまでもなく人間業を超躍したあらゆる努力・忍耐・克己を惜しげもなくふりまいた。然しすべては綺麗あつさり水泡に変わつてしまつた。そこで話はこのところから始まるのだが、話の本筋にとりかかる前に、例の甚だ少数な（時々これは疑ひたくなる真相であるが——）読者のために、

いささか蛇足の挿話を加へて、尊嚴な弁護士・椋原孔明氏の人間業とも思はれない努力・忍耐・克己の状をあらまし述べておく必要がある。かういふことは読まないさきからもう心臓がふるへてくる、目をそむけたい、できることなら本をビリ／＼裂きたいやうなものである。身を切られる苦しきとはこのことだ！ やりきれない！ とはいへ、こんなことを事こまやかに書かねばならぬ私の方は、これはもう何の因果かわかりやしない！

第一回目の金策訪問に於ける椋原孔明氏の毅然たる心事ならびに凜然犯すべからざる態度その他。——

金策に出向く誰の場合も同じやうなものであらうが、第一回目の狙ひをつけるこの緊張した訪問先といへば、いふまでもなく一

番金を貸しさうな、そのうへ言ひにくいことを切りだすにも相当
気軽で気のおけない（従したがって而先様の方も断はるにつけて気がお
けない！）まづザツと地上に一人か二人しかない斯ういふ頼もし
い人物を選ぶものだ。いはば金策とよぶ至難な事業の軽い瀬ぶみ
のやうなもので、拒絶をくつても気がおけないから何んとなく楽
天的な余裕もあり、壮烈なほんとの軍いくさはこのあとだ！——つまり、
洋々たる前途を望む雄大な気概なぞといふものがあつて、そこで
第一の人物を訪ねるときの道々の気持なぞといふものもつひ鼻唄
がとびだすほどの言ひやうもなく爽快なもので、戦前すでに敵を
呑む痛快無類な気組みなども充分持ち合はしてゐるものである。
ところが、扱さて、愈々第一の人物に会见し、南無三宝！　ここで

アツサリと思ひもよらぬ拒絶を喰ふと（——いやまつたください！
いくら覺悟をきめた上でも拒絶をくふとは思ひもよらない！）それからそれへと思ひもよらない心境の変化が続出してくる。第一に途方にくれてしまふのである。アアもうこれで万事休したと思ひつく。さて改めて、第一の人物ほどの人物が地上に二人とあるものかといふ、凡そ論外なペツシミズムの虜になる。洋々たる前途を望む気概などは糞くらへといふ無法極まる癩癩すら起きるのだから言葉もないほど情ない！

尊嚴な弁護士・椋原孔明氏は生れつき樂天的な男子であつた。

かういふ人こそ大丈夫だますらおと言ひたいやうなものである。かういふ見事な健男児は無役に先走りした神経質な考へごとにクヨくと

余計な苦勞をしないもので、拒絶を喰らつたそれからの思ひもよらない心境の悪化なぞにはてんで予感を持ち合はずひまもないから、しんから陽気でおまけに殆んど幸福だつた。言ふまでもなく戦前すでに大敵を呑んだ壮烈な氣組みで、誰の目にも颯爽として第一の人物邸へ乗りこんだのである。

玄関口へスツクとばかり立つた時には、まづ案内を乞ふ前に「三千円！」と大きな声が腹の奥から突きぬけて脳天へどしんといふほど木魂した。「俺や腹の底の方に途方もなく強情な、負けん氣の、勇ましい奴があるな」と尊嚴な弁護士は頼もしさうに呟いたほどだつた。まるでもう三千円がよろいかぶと鎧兜かぶとに身をかためて腹の奥にふんぞりかへつてゐるやうなものだ。そこで棕原孔明

氏は極めて冷静に呼鈴を押した。

第一の人物はニコくしながら現れた。この男はいつも機嫌がいいのである。こういうふ機嫌のいい男は当り障りのないことに打つてつけの人物で、言ひにくいことを切りだすにはどうも都合のわるいものだ。切りこむ機会が見付からなくて取つ付きにくいものである。然し椋原孔明氏は意気冲天の氣勢が揚がるばかりであつて、怨敵の笑顔ぐらゐにビクともしなかつたばかりでなく、普段の訪問にくらべると却つて慎しみも遠慮もなかつた。そこで椋原孔明氏は無法なぐらゐる相手かまはず喋りはじめた。

「ほかでもないが三千元要ることがあつてね、三千元貸してくれ
たまへ」

彼はまづ斯うはつきりと言ひ切つた。

「三千円貸してくれ！」

もう一度つづけさまに唸りをたした。

三千円！　三千円！　三千円！　そこでもう彼の喉に彼の拳に彼の膝に三千円の大洪水が溢れだしたのであつた。言葉といふものは不便なものでどう急いでも一語づつしか出ないものだが、それが何よりじれつたい様子で、尊厳な弁護士・棕原孔明氏は言葉の泡を吹きはじめたのだ。つまり、如何にして、又如何様に三千円が必要であるか、それが必至の事情によつて殆んど必死の状態にまで必要欠くべからざるものであるかといふことを、微に入り細にわたり、しかも豊富な感激に狂つたやうに酔ひながらまくし

はじめたのである。まるでもう思ひもよらぬ出来栄であつた。五分あまりの時間といふもの溢れる水と同じやうに、むやみに言葉が・感激が・落付きが、（いや全く！ 落付きまで！）流れだしてくるのである。非常な亢奮に拘らず、非常に冷静な計算が、彼の態度を時に応じてととのへさせるのであつた。彼は真剣な顔をした。時々シンミリと落付いた苦笑を（さうだ！ 決して微笑ではない！）浮かべた。時々情熱を漲らした。時々ちよつと気取つてみた。時には巧みにへりくだつた。これはもう作為と自然が合致した至妙の芸術と言ふべきもので、金策といふ唯一の場合でなかつたら、フロオベエルもこんな境地に浸つたことはなかつたのである。

語り終つた凱旋的な好気分！ 孔明氏は思はずホツと一息洩らして手中の獲物を見すくめるやうに相手の様子をうかがつた。——と、返事がない。皆目手^{てこたえ}応といふものがない。木像だ石臼だ^{がまふくろう}墓だ梟だ鮫鱈だ……

「どうもすこし——」と孔明氏はゾツとしながら考へた。「調子にのつてあんまり早口に喋りすぎたやうだつたが、そこで話がききとれなかつたといふわけかな？ そのほかの理由といふのが考へられない……」

そこで棕原孔明氏は閃めくやうに勇氣を燃やし、今度は落付きの方に充分以上の氣を配りながら、整然たる順序を追つて同じことを丁寧にくりかへした。

二度目の話が完全に終りをつげた瞬間だった。

「いや、もう、二度だけで充分」と、第一の人物はすこしも周章あわせずと言った。

「三千元！ ああ！ その金が俺の懐に今あつたら！ 俺はすぐにも兜町へ飛んで行くんだ。畜生！ みすく儲けが分つてゐながら……」

第一の人物はなほも至極冷静に述懐をつづけた。

「三千元！ 逆様にふつても鼻血もでないとはこのことさ。先月ちよつと儲けたと思ふと今月はもう倍の損だぜ。ここ四五日といふものは一日に五回ぐらゐの割合で自殺がしたくなるほどなんだ。やりきれない！」

「冗談ぢやないぜ！ 君が三千のはした金をもたないなんて！」
棕原孔明氏は呆氣にとられて、自分の呆氣を打ち消すやうに周章でふためいた大きな声で喧嘩腰にかう喚いた。

「冗談はよさうぜ！ 俺はもうギリ／＼ほんとに三千円必要なんだぜ！ おい三千円貸せつたら！ たつた三千円のことなんだぜ！ たつた三千円——」

「これが冗談だつて？ 驚き入つた話ぢやないか！ 俺は自殺を
するところだぜ。この瘡せた頬つぺたを見てやつてくれ！ くぼ
んだ眼玉を見てやつてくれ！ ああ！ 二週間といふものは夜も
ろく／＼眠れやしない！ 毎日々々考へるのは自殺ばかりだ！
毒薬にしやうか、首をくくらうか、鉄道線路の露と消えるか……」

「いやはや、そんなことは君——」と、棕原孔明氏は相手の言葉を一気に打消したいもどかしさから、猛烈に両手をふつて身悶えした。

「そんなことは君、とにかくそれでいいことだよ！　とにかく俺は三千元——」

「だから君、逆様にふつても鼻血もでない状態なのさ」

「冗談ぢやない！　たつた三千元！　俺はほんとに必要なんだぜ！」

棕原孔明氏は完全に亢奮して立ち上つた。完全に亢奮して第一の人物邸をとびだした。その諷爽と又猛然とふるひたつた意気込みは今迄の凜然たる構えでさへも比較にはならぬ見事なもので、

まるでこれからがほんとの金策に出掛けるところだ！　と思はせるやうな勇ましいものに見えたのである。

「冗談ぢやないぜ！　たつた三千元！　俺はほんとに必要なんだぜ！」

彼は道へとびだしてから、部屋の中で喚いたよりもよつぽど情熱のこもつた声で、はりさけるかと思はれるぐらゐ荒々しく叫んだ。その凄然たる叫びをきけば、どんなに血のめぐりの悪い人達でさへ、ああ棕原孔明氏は今しも三千元の切実な必要に迫まられておるなと納得せずにはゐられない鋭いものがあるのだつた。そこで棕原孔明氏は彼がなほ何人かの邸内に於て何人かと会見しつつあるかのやうに、その同じ叫びを呟きつづけて道を歩きはじめた

のだ。

「冗談はよしてくれ！ 俺はほんとに、たつた、三千元……」

然し椋原孔明氏の頑固一徹な眩きから、次第々々に力と情熱がぬけてきた。眩きから力が抜けてきたばかりか、全身から、つまり、歩く足から、股の付根から、腰骨から、頸から眼玉のまはりへかけて、力がそつくり抜けてきたのだ。今にもへたくと道路の上へへたばりつくかと思はれたのである。

「冗談ぢやないんだぜ！ 俺はとにかく、たつた……」

最後に椋原孔明氏がからくも斯かよう様に眩いた瞬間は、彼が丁度停車場へ片足辿りついた時であつた。同時にそれは、扱て、これからワシはどこへ行つたらいいんぢやらうといふ皆目目当のない不

安が一時にこみあげてきて、胸が全く暗闇になつた時でもあつた。さういふわけで、最後の眩きを洩らした瞬間、彼はもはや全くどうすることもできなくなつたのであらうが、なんの躊躇ためらふところもなく傍かたへのベンチへただへたくと崩れ落ちたのであつた。――これから先の心境の変化は先刻すでに書いておいた通りである。

椋原孔明氏の第二回目の金策訪問。

はじめに一言断つておかねばならないことは、尊嚴な弁護士・椋原孔明氏が再び蠟燭の如き勇氣を燃焼せしめて第二回目の出陣にとりかかるためには、ちようどまる九日間といふ完全に何事もしない日数が必要だつたといふことである。そこで椋原孔明氏は何もしいといふことの底知りがたい平和の歡喜をこんなに強く

感じたこともないのだつた。まる九日のあひだといふもの殆んど寝床にもぐり通して暮してゐたが、こんな柔らかな幸福には生れてこのかた巡りあつた記憶がなかつた。

第二の人物を訪ねる時には、椋原孔明氏の胎内に臆病といふチヤチな悪魔が棲みはじめてゐた。ガサツで氣障でにやけた奴だ。

第二の人物氏邸の門前まで辿りついた時のことだが、ガサツな奴め！ 鼻持ちならないにやけた根性の瓢六玉で、いきなりクルリと振向くと尻尾を下げて後ろも見ずに走りだした。孔明氏が吃くびびつくり

驚して、ドドドドどこへ行くんだ、オオおれの行先はそつちぢやないぜと言つてるうちに一町あまり戻つてしまつて、それですんだと思ひのほか太い畜生があるもので、まるで散歩に来たやう

な取済ました面魂で第二の人物氏邸を大廻りに一周した。もしや
くしやした孔明氏はこみあげてくる癩癩で涙がでさうになるので
あつたが、にやけた根性の瓢六玉はなんとも不快な小人物で、ム
ツとふくれて顔をそらしてしまふのである。なじられるのが気に
いらぬといふわけである。

漸くのこと第二の人物に会つてみると、この人物は所用があ
つて大阪へたつ間際であつた。小人は養ひがたしと云ふことがあ
るが、キザでにやけた瓢六玉の畜生め、ここでもひどい大間違ひ
をやらかしたのである。

「なんぢや、用かね？」と、待ち構えてゐた大事な文句をうまい
ぐあいに第二の人物が言ひだした時に、瓢六玉の青二才！ 豚の

尻尾！ 「いいえ、別段、ヘツヘツヘツ」と、孔明氏が呆氣にとられる隙も洒々とぬかしたものだ！ そのうへ恥の上塗りで、「お忙しいところをお邪魔しまして、まことにどうもイヤハヤ」なんぞと余計なところで下らん頭をさげたのである。くさつたのが孔明氏で、用もないのに便所へ遁れて荒縄のやうな溜息をもらした。

「然らば——」といふわけで、第二の人物は忽ちスツと立ちあがる、自動車にのる、東京駅へ行つてしまった。

孔明氏は絶望した。猫イラズにしやうか、瓦斯^{ガス}管を頼ばらうか、いつそ身投げにしてくれやうか。さういふ下品な考へごとが浮んだおかげで、今度は逆に奇蹟のやうな勇猛心が溢れあがり——

といふほどでもないが）まづ、溢れるやうに零れてきたと言つておかうか。そこで突然一大決意をかためると猛然円タクに身を躍らして、蒼然たるあの黄昏の狂燥で東京駅へ駆けつけたのである。「RRRRRRR！ なアンぢや！ 見送りに現れをつたか！」と、第二の人物は暗然たる面持をして心底深く呆れかへつた模様であつた。

「マ、左様なわけで。ヘツヘツヘ」

と、孔明氏は言葉を濁して頭をかいたが、愈々汽車が動きだすとそこは丈夫の一念で一時に血潮がただメラ／＼と燃えあがり、三千人が（三千円だ）一度に喚きはじめたやうな慌ただしきで汽車諸共に動きながら拳を振つて叫びはじめたのであつた。

「三千円拝借したいと思ふのです。一言よろしいと言ふだけで沢山！ イヤ、ほかの言葉は罪ですぜ！ 三千円だ！ 必要だ！

ぜひと必要！ たつた三千円！」

「ウム、三千円か。若干の金額ぢや。生憎当今囊中逼迫、イヤ、心緒揺落に逢ひ秋声聞くべからざる有様ぢや。秋風落莫諸行無常イヤハヤマことに面目ない次第ぢやて。ワアツハツハ。ある所には山とあるのがこれ又黄白の持前ぢや、天理でナ、ノンビリと探すにしくものはない。イヤモウ人間はいつてき一擲千金すべ渾て是れ胆ぢや。囊中自ら銭有るといふこともあるがな。心配いたすな。大鈞は私力なく万理自ら森着すぢや。イヤ誰しもが黄白には悩みおるて。ワアツハツハツハ。安心いたせ！」

と、見る／＼あちらへ行つてしまつた。汽車の尻尾が消えてしまふと、孔明氏はホツとして振返つた。汗がグツシヨリ滲んでゐたが、ヤレ／＼これでひとまづ一難すぎさつたといふ戸惑ひした梟のやうなガサツな平和が流れてきた。——なるほど金談を切りだすに當つて、これ程あと腐れのない好機会といふものは、これを仕事に狙つてゐてもめつたにぶつかるものではない。然し又、断はる方にしてみても、これぐらゐ胸のすくほど快々適な絶好機会といふものは、よつぽど運のいい男が一生涯にたつた一度めぐりあふばかりとある。

第三回目・第四回目・第五回目……それはもう一々語る必要はない。要するに万事万端蹉跌した。さうして椋原孔明氏は蹉跌の

回が重なるにつけて、うねうねと曲りくねつた平和の底に深まりこんでゐたのであるが、——話は愈々これからで……

さて、かういふ平和などある一日のことであつたが、尊嚴な弁護士・棕原孔明氏が平和そのものの目覚めをむかへてふと氣のついた時であつた。言ひやうもなく^{あや}絢のある、妖しいまでになまめかしい考へごとが宙ブラリンに浮いてゐて、フオツと眼玉へとびこんでくると脳味噌の中へおさまつた。

「オヤ！」先生やにはに吃驚して跳び起きた。夢ではないかと思つたのである。そこで目玉をこすつてみた。

「冗談ぢやないぜ。人をからかふのもいい加減に、そんな莫迦な……」

と彼はうろく／＼部屋の中を歩きだした——が夢ではない！

「こりア驚いたな！ どうして今迄——わしアびつくりしてしまつたな！ こんな手近かな、年中思ひだす男のことを、どうして又今度に限つてフツツリ忘れてゐたのだらうな！ やあモウ俺は……こりア人間業ぢやあない！」

いや、驚いたのは孔明先生ばかりではない。私でさへも氣絶するほど吃驚仰天したのである。

第一の人物中の第一の人物（——さうだ全く第一の人物中の第一の人物！）地上に二人とかけがえのない大人物を今迄すつかり忘れきつてゐたのではないか！ 第一回目の金策は当然この人物へ行くべきもので他の何人へ廻ることも不可解であり、然して見

給へ、第二回目と出向く必要はないところの、地上に一人のかけがえのない人物ではないか！

「ウアツ！ 畜生！ なんて又俺はだらしがなすぎたんだ！

籠べらぼう棒め！ いくら取りみだしたとはいったところで、こんな大

事な友達のことをどうして今まで……タツハツハ！ まるでもう

目がくらむ！ 氣狂ひになりさうだ！ 大願成就がやつてきた！」

孔明氏はあまり激しい喜びのために一時はあぶない状態だった。かういふあぶない喜びは若いうちに誰しも一度は覚えがある。三日ぐらるといふものは眠れないので愈々俺もこれまでだと厭世的な書置きを書きしたためたりするものだ。

かけがへのない人物は北国の山の底にすんでゐた。金？ そんな

なものは腐るほどある！ 三千円——イヤハヤどうも、さりとはケチな話でないか！ ワツハツハ！ かけがえのない人物は全くもつて意気好みの万事が派手で綺麗な男だ。天性自ら風流を解し人情の秘奥に通じ雑学の大家とある。磊落にして豪放、訪客の絶えざる時は数年といへども觴さかずきを持して不眠といふから凄いものだ。尊厳な弁護士・椋原孔明氏とは莫逆の友であつた。ああ、また何をか言はんや。

尊厳な弁護士・椋原孔明氏は旅費の苦面がつかかなかつた。——ほんとの話を打ち開けると、苦面しやうとしなかつたのである。人間の顔を見るのはもう沢山だ！ かけがえのない人物でも（かういふ愉快な人物は考へただけでもう幸福だ——）わざく顔を

眺めるのはもうブル／＼だといふ奴で、人癲癩といふこともあるがそれとは余程種類の違ふものである。陽氣の加減で神経がおきるといふ奴ではなく、あのブル／＼を思ひだすと陽氣の方まで變つてくるといふ奴だ。人癲癩に覚えはなくとも、こつちの方は誰しも胸に覚えがある。それに尊嚴な弁護士は、どういふものか持つて生れた性質で、喋る方は苦手であるが、（稀代の名文！）筆さへとれば鬼神を悩ます自信もあるといふのだつた！ 手紙。それの効果を考へると、もう金策は成功以外の何物にもぶつかるところのありえぬことが、手にとるやうに分るのである。

彼は手紙をしたためた。手がふるへる胸がふるへるといふことはとかく世間にありがちだ。汗がでる熱がでるといふこともある。

然し椋原孔明氏は泰然として騒がざること山岳のごとく、沈黙考ほしいままに詩神の国をかけめぐつて、あらゆる技巧、あらゆる至妙の殺し文句を総動員した。それはもう完璧とのみ言葉はない。いつかな罫にはかからない銀狐でも、こんな手紙を読んだなら、身ぐるみ脱いで早速毛皮を送つてやらうといふ氣になつたに違ひない！

投函した！ その瞬間から世界中に大戦争が勃発したに相違ないと思はれる理由は、椋原孔明氏の行く先々では何から何まで殺氣立ち、眼が血走り、諸肌ぬいだ緊張ぶりから分るのだつた。けつまづく。背中へ本が落ちてくる、頭へ時計だ、椅子が脛へ喰らひつく。額縁がヒラリ／＼と壁から壁へとびまはる、あつちでコ

ツプが、こつちで瓶がわれはじめ、ボヤがでる、うつかりすると命があぶない。

二日すぎ、三日すぎた。四日・五日となつてくると、アルヂエリアちやあ五六百万戦死者がある、一週間、世界中の軍艦といふ軍艦があらかた海のもくづと消えて大西洋ちや土左衛門で海が見えない、二週間、愈々地球もおしまひだ——と、手紙がきた！
まさしく返事が来たのである。——

手紙の奴を二本の指につまみあげてフラフラフラツと机の前まで歩いてくると、まつさきに身体全体ぼんやりした。お次がゾツと凍りついて思はずブル／＼ふるへあがつた。どうしてくれやうこの手紙。どこへ置いても目ざわりだ。一目見るともう心臓がゾ

ツとくる！　で、よそみをしながら机の上へ投げだした。振向いて後ろも見ずに窓際へくる、晩春のくつきり澄んだ朝空をみる、青い空！　アア畜生！　どうも腰骨がガタ／＼する！　あしおと 登音を殺しながら又フラ／＼と机のところへ戻つてきて、机の周囲を三周四周五周六周・七へん廻つてなんとかといふあのあたりで、これだ！　といふ思ひつきがとびだした！　さうだ、かうしちやゐられない。上着をかぶる帽子をきる慌てるな窓掛をおろせ。机の方はふりむくな例の奴には目をくれるな鍵をおろせ外へとびだせ。忽ち外へとびだしてホツとしながら空を仰いだ。青空だ！

一直線に公園の中へとびこむと風を切つてグン／＼歩く。爽快といひ健康といふのはこのことだ。そこで——手紙ア、手紙！

読める！ 平氣だ！ なんのこつた、朝めし前の腹ごなしにもつてこいといふ奴ぢやないか！ エエ畜生！ なんだつて又ポケットの中へあいつをねぢこんでこなかつたんだ！ 千慮の一失、一期の不覚といふ奴で、そこで棕原孔明氏は突然わが家の方をめざして全速力で走りはじめた。——が、机の前まで戻つてくると急にゾツと縮みあがつてブル／＼ふるへた。どうもいかん！ 手紙を掴んだはずの手がどういふものかし雑誌を掴んで戻つてきたので仕方がない、頁をめくつて部屋の中をグルグルグル廻つてみる。深呼吸。便所へ行く。水をのむ。——然し丈夫の一念でそこは流石に見上げたものだが、たうとう手紙の封を切つて椅子へどつかり落ちこんだ。そこで次にあるやうな、かけがえのない人

物からの大事な手紙を読みはじめた。

かけがえのない人物からの大事な返書

なつかしい哉孔明先生

山の奥にも春がきました。谷も径も杜も峠も一様にまだ数尺の残雪がくまなくしきつめてゐるのですが、雪国の春ならで見られない輝やきみちた青空。雪原もかがやき、山もかがやき、中空もかがやき、大空の奥ふかく又輝やける透明が跳ね光り降り、なべてひたすら光らうとのみするやうです。長い陰鬱な雪空におしつぶされてゐた村人は、この青空の訪れをみると全ての用をなげう

つて広い雪原へ走りですにゐられなくなります。彼等は口々に声かぎりの叫びを放ちながら、青空をさして腕を高らかにふりあげ、かゞやきみちた雪原を右往左往にかけめぐるのです。光りに向つてひらかれた甘美なさて又狂燥にみちた官能の唄声、それは嗚呼ひとり里人のみに限られたものではありません。嗚呼木木が嗚呼草が又さうなのです。嗚呼地上にはなほ数尺の残雪が石のやうにかたまりついて張りつめてゐるのに、嗚呼山毛櫨ブナの林はやはらかな緑の芽を嗚呼ふきだしてくるのです。半年ぶりに嗚呼新鮮な緑を眺めた里人たちのよろこびは、嗚呼ひたすらな無言、嗚呼身動きすら忘れきつた長い長い凝視によつて表はされるのです。さて又堅い数尺の雪をわれれば、嗚呼雪の下にも嗚呼ふるへるやうな青

い芽が嗚呼ふきだしてゐるではありませんか。嗚呼季節に向つて
孜々^{しし}として歩きださず^しにゐられない嗚呼生けるものの嗚呼泪ぐま
しい意志に打たれて、人々は嗚呼と驚きの叫びを放ちます。その
芽をとつて食卓に供へた夜の嗚呼賑やかさ。嗚呼新鮮な味覚。さ
て又翌日をむかへれば、麓への交通をつけるために里人は山がひ
の径へ集合しますが、嗚呼勤労の歡喜、彼等は径の雪をわり深い
谷底へ嗚呼歡喜の叫びをあげながら突き落とすのです。嗚呼かく
て大地を再び見ることの嗚呼感激、嗚呼嗚呼嗚呼。夜は夜で嗚呼
生ける季節の祝典のために村芝居の支度にとりかかるのですが、
折もあれ嗚呼村一番の義太夫語り鎮守の神主が嗚呼風をひくとい
ふ嗚呼驚きに襲はれます。芝居の初日もさしせまつたこととて嗚

呼村人の心痛は一方ならず、村医者は嗚呼枕頭につききり、青年
団も嗚呼徹宵看護につとめますが、神主は嗚呼村医者の薬餌には
見向かうともせず嗚呼長年の習慣どほりの一升酒でみるみる嗚呼
治つてしまふのです。さて又村芝居の始まる頃は嗚呼桜もチラホ
ラ咲きはじめ、やがては又嗚呼泌みるがやうなあの青葉の季節、
嗚呼山また山の青葉をわたる広々とした嗚呼爽やかな嗚呼初夏の
嗚呼風、嗚呼さては又嗚呼谷底の嗚呼雑草の嗚呼陰に嗚呼顔をだ
す嗚呼名も知らぬ嗚呼小さな嗚呼花花。さうして全ての残雪が谷
の底からも消え去る時は、嗚呼もうあの綿のやうな雲の浮く夏の
盛りがきてゐるのです。その夏も亦ひととき。ゆく春や、嗚呼多
感多感。

棕原孔明兄台

花眠山莊主人 権堂又助

二の巻

一陣の風はやてとなりて消えたるにや杳としてわがますらをの消息知る人もなしといふ

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 01」筑摩書房

1999（平成11）年5月20日初版第1刷発行

底本の親本：「作品 第六卷第七号」

1935（昭和10）年7月1日発行

初出：「作品 第六卷第七号」

1935（昭和10）年7月1日発行

※新仮名によると思われるルビの拗音、促音は、小書きしました。

入力：tatsuki

校正：伊藤時也

2010年5月30日作成

2016年4月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金談にからまる詩的要素の神秘性に就て

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>